

また、定理 3.4 の証明で与えた微分同相写像

$$(3.84) \quad \Phi: M_{C_{i-1}+\varepsilon} \rightarrow M_{C_i-\varepsilon}$$

を考える。すると、 N_{i-1} と $M_{C_{i-1}+\varepsilon}$ を同一視した上で、 i 番目のハンドルが、 N_{i-1} に張り付くときの接着写像 φ_i は

$$(3.85) \quad \varphi_i = \Phi^{-1} \circ \varphi: \partial D^{\lambda_i} \times D^{m-\lambda_i} \rightarrow \partial N_{i-1}$$

である。(定理 3.4 参照)。

微分同相写像 Φ のことを少し詳しく考えてみる。 $C_{i-1}+\varepsilon$ と $C_i-\varepsilon$ の間には f の臨界値が存在しないので、前の章の定理 2.31 より $f^{-1}([C_{i-1}+\varepsilon, C_i-\varepsilon])$ は $\partial M_{C_{i-1}+\varepsilon} \times [0, 1]$ に微分同相である。

$$(3.86) \quad f^{-1}([C_{i-1}+\varepsilon, C_i-\varepsilon]) \cong \partial M_{C_{i-1}+\varepsilon} \times [0, 1]$$

そしてこの微分同相写像により両者を同一視すると、 $\partial M_{C_{i-1}+\varepsilon}$ の各点 p につき、(3.86) の右辺の $\{p\} \times [0, 1]$ は、左辺では上向きベクトル場 X の p を通る積分曲線に対応している。

実は (3.86) の微分同相写像をもう少し広い範囲で定義することができる。それは $[C_{i-1}+\varepsilon, C_i-\varepsilon]$ より少し広い範囲。例えば $[C_{i-1}+\varepsilon/2, C_i-\varepsilon/2]$ にも f の臨界点がないからで、 δ を十分に小さい正数としたとき、微分同相写像 (3.86) は次の微分同相写像

$$(3.87) \quad f^{-1}([C_{i-1}+\varepsilon/2, C_i-\varepsilon/2]) \cong \partial M_{C_{i-1}+\varepsilon} \times [-\delta, 1+\delta]$$

に拡張される。この両辺を同一視すると、やはり、右辺の $\{p\} \times [-\delta, 1+\delta]$ は左辺では X の積分曲線に対応している。

問題にしている微分同相写像 Φ を右辺の言葉で言うと、 Φ は $\partial M_{C_{i-1}+\varepsilon} \times [-\delta, 0]$ を $\partial M_{C_{i-1}+\varepsilon} \times [-\delta, 1]$ に引き伸ばす微分同相写像である。すなわち、

$$(3.88) \quad \Phi: (p, t) \mapsto (p, \frac{1+\delta}{\delta}t + 1), \quad \forall (p, t) \in \partial M_{C_{i-1}+\varepsilon} \times [-\delta, 0]$$

である。境界 $\partial M_{C_{i-1}+\varepsilon}$ に制限してみると、((3.87) の右辺の言葉では) Φ は $(p, 0)$ を $(p, 1)$ に対応させる写像になっている。

N_{i-1} と $M_{C_{i-1}+\varepsilon}$ を同一視して、 $\partial M_{C_{i-1}+\varepsilon}$ のイソトピー $\{h_t\}_{t \in J}$ が与えられていると考えよう。イソトピーの定義により、

$$H(x, t) = (h_t(x), t)$$